

身近な誰かを思いながら本を朗読することで、罪を犯した人たちの更生を促す試みが、山口県にある刑務所「美祿社会復帰促進センター」で取り入れられている。受刑者が全六回の講義を受ける中で、本と出会い、他者との関係を考え直すきっかけを見いだしていくというのだ。「絆プログラム」と呼ばれるこの試みは、刑務所だけでなく、心のケアが必要な人のいるさまざまな場所での応用も期待されている。

(中村陽子)

刑務所で実践「読み合い」

学校の教室のようなセンターの一室。一角には「べり」と「ら」たるまちゃんといふ「ぐちゃん」など、絵本や児童書約三十冊が並ぶ。黄色いシヤツを着た六人の女性が、講師の児童文学作家で梅光学院大教授の村中李衣さんを囲んで座り、話に聞き入っていた。彼女たちは全員、初犯の受刑者だ。

講義では、それぞれが、自分の子どもなど誰かに読んであげることを選定して一冊を選び、順に出て朗読する。そして受刑者同士で、感想を伝え合う。村中さんが「恥ずかしいのを超えて、お母さんが本気になって読めば子どもに伝わります。現実がどんな状況でも、本を読む



村中さんから朗読の仕方などについて聞く受刑者たち。山口県的美祿社会復帰促進センターで(一部画像処理)

塀の中から 誰かのために



一般向けに開かれた絆プログラムの講習会。参加者らが互いに本を読み合う実習も行われた(東京都内で)

本の現場から

ひとときだけは幸せになれるんだ、ということを知りたかった。お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お友達、みんなに読んであげたい。お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お友達、みんなに読んであげたい。お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お友達、みんなに読んであげたい。

美祿社会復帰促進センターは、民間に業務の一部を委託する「PFI刑務所」として二〇〇七年に開設。昨年に初めて絆プログラムを取り入れた。

更生支援の取り組みは、薬物の害についての講義や、被害者の遺族の講演などさまざまあるが、書籍を使うのは、このプログラムだけ。自身の罪を直接振り返るのは異なり「塀の外」にいる誰かに働き掛ける点が特徴的だという。調査官の田平隆さんは「受刑者は他人から認められた経験に乏しく、社会の中の自分の役割が分からないという人も多い。本を読むという行為は、想像力を育てること。誰かのために、と考えてみる体験は、ここを出た後の

生活に役立つと思います」と説明する。

参加した三十代の受刑者は、自宅にいる小学生の息子思いながら朗読したという。「絵本は、ばかにしたもんじゃありませんね。だんだん本の中に入っているような気分になって、作者はこういう

三月には、刑務所以外の現場でもプログラムを取り入れるための講習会が、東京都内で開かれた。集まったのは、教員や、看護師、臨床心理士など約十人。村中さんが同じく講師となり、自分たちでプログラムを体験しながら、お勧めの本や講義の進め方を学んだ。

受講した臨床発達心理士の村上女子さんは「本は個人の痛みや苦しみに寄り添うもの。ただ読むだけでなく、声に出して表現して、受け止めてもらうことは、強い支えになると思う。子どもとうまく向き合えずに悩んでいるお母さんたちにも、いい効果をもたらすのではないかな」と話していた。

ことが伝えたいのかな、と考えた。息子にも伝えられる気がした。気持ちの伝え方を教えてもらっているんだと思う」と感想を話した。

プログラムは、センターの職業訓練や教育支援を担っている小学館集英社プロダクションが企画・開発した。「物語を届けた人と人の関係、絆を見つめ直すことが狙い。家族に対する前向きな気持ちや、再犯防止につながる。受刑者同士で本を読み合うことで、相手の気持ちを受け止める雰囲気も生まれる。施設内は社会の縮図。受刑者に役立つものは、社会一般でも役に立つはず。いろいろな人に応用してもらえ」と担当者も話す。